

新たな学習交流拠点を目指して

ー 神田外語大学附属図書館の活性化、そしてこれからの取り組み ー

神田外語大学附属図書館 課長

吉野 知義

はじめに

本日は、東海地区大学図書館協議会というとても大規模な、そしてとても歴史のある協議会にお招きいただきまして、本当にありがとうございます。「新たな学習交流拠点を目指して」ということで事務局からテーマをいただきました。実は、2016年に私学経営研究会の『私学経営』という雑誌に同じタイトルの記事を掲載していただきました。これが元になっておりますが、それから約2年経過しておりますので、その記事の内容プラス2年分、そしてこの先ということをお話しできればと思っております。

神田外語大学について

私の勤めております、神田外語大学は、JRの東京駅の隣駅、神田駅の近くにある神田外語学院という英語の専門学校を母体として1987年に千葉県幕張に開設した4年制大学です。

学部は外国語学部1学部のみで、1学年約1,000人、全学生約4,000人という規模です。学科は、英米語学科という英語を中心の学科が半分ぐらいで、その他に国際コミュニケーション学科、アジア言語学科で中国語、韓国語、タイ語、インドネシア語、ベトナム語、それから、イペロアメリカ言語学科でスペイン語とブラジル・ポルトガル語専攻という構成になっております。男女比では女子学生が多くて、7割ぐらいが女性という感じですが。

神田外語大学附属図書館について

その中にある図書館ですが、このガラス張りの凝ったデザインの建物が図書館です。図書館の利用状況で言うと、蔵書冊数は大体18万冊で、貸出

冊数が年間2万冊程度、昨年度の入館者数は12万5,000人となっております。このぐらいの規模の大学だということをご理解いただきたいと思います。



このスライドの右上にもずっと出していますが、先ほどご覧いただいた図書館の建物をモチーフにしたピクトグラムを自作して、昨年の図書館総合展ではこのピクトグラムを中心に、図書館内のサイン計画の話とか業務改善の話などをポスターセッションで出しておりました。その後、今年の2月の図書館雑誌にも、そのピクトグラム、サイン計画の話に掲載していただいております。こちらの関係でも今年はいくつか講演などをさせていただいているので、そちら方面でご存知の方がいらしたらうれしいです。このようなことも今日ご紹介する取り組みのひとつになるのかもしれませんが。

自己紹介

自己紹介もさせていただきたいと思います。図書館情報大学を卒業して、丸善株式会社(現丸善雄松堂株式会社)に入社しました。その後、武蔵工業大学(現東京都市大学)という東京の理工系の大学で図書館の仕事をしておりました。ここで新図書館の建設計画とか建築に関わって、データ

ベースの導入や電車ジャーナル化を進めてきました。その後、丸善株式会社に再入社して、リンクリゾルバなど電子系商品の販促や電子書籍の企画開発に携わりました。

その後、2012年に今の神田外語大学に転職しまして、最初は図書館の課長だけだったのですが、その後、学長室の情報戦略担当課長とかIR推進室も兼務させられるようになりまして、今年の4月からそれも変わって、教務部の次長と図書館の課長とIR推進室という3つ掛け持ちの形でやらせていただいております。

当館の取り組みの背景について

この研究集会のテーマは、先ほど館長先生からお話がありましたように「新たな知を創出する大学図書館の取り組み」です。今回の研究集会には、従来の大学図書館の枠をはみ出した活動をされているとお呼びいただいたわけですが、これをもらったときから結構きつくて、大学図書館の枠をはみ出した活動というのは何なんだと。「はみ出した」なんです。はみ出し者、アウトローなんです。そんな話をしているのかということと、実際にやっているわれわれに、それがはみ出していたのかどうかという認識がまずないというところで、では何を話せばいいのかというのが困りどころでした。

今日は、5つぐらいの取り組みをご紹介します。先ほどご紹介したように、2012年に転職してきましたので、その2012年から私がやってきたことになるのですが、転職のとき、さまざまな場面でとにかく「活性化」ということをずっと言われまして、図書館を活性化してほしい流れになっていたんですね。「活性化と言われても、別に活性化してきた実績はないし」と思いながら、職に就いたわけです。

さて、勤めてみると、先ほどもご紹介したような奇抜なガラス張りの建物の1階部分が図書館です。今で言う、とてもインスタ映えのする建物で、左下にあるように、夜景もとてもきれいな建物になっています。これが7号館という建物で、1階が図書館、2階が英語以外の言語を学習する多言

語学習センター、3階にカフェという構造になっています。中身はこのような感じですよ。珍しいことに無垢の木材のフローリングが全面使われていて、カラフルな椅子、仕切りのない、一面見渡す限りのフロアで、片面ガラスですので非常に明るい開放的な図書館です。



このように見栄えがいいので、学生が来るだろうと勝手に思っていたわけです。これはみんな思うよね、と。そこで、活性化といえ入館者数を増やさなければということで、過去の入館者数をチェックしてみました。

すると、徐々に減ってきて、2008年で底を打っているわけです。2008年に今の7号館の新図書館ができましたということで、2009年からは持ち直します。ただ、2010年までの2年間で新図書館ブームはあっさりと去ったようで、2011年には元通りの12万人台に戻っています。こういう数字をもし当時面接していた経営側が知っていたとすれば、それは活性化してほしいと言いますよね。私はこの数字を後で知りましたが、「ああ、そういうことなのね」ということで、まずは入館者数を増やすことをいくつかやってみようということから始めてみました。



活性化に向けたポリシーづくり

そうは言っても、何をやったらいいのかというのは、皆さんもお悩みのことと思います。私の想像では、どこの図書館でも入館者数とか貸出冊数は微減というか、激減というか、決して驚くほど伸びるような感じではないと思います。そうではなくて、いや年々右肩上がりですということだったらすみません。後でご質問のときにご意見をいただきたいと思います。

では何をすればいいのか。そのときに、最初におち当たるのが職員のことでした。そんなにいろいろやっていて何人の職員さんがいるのですかとよくご質問いただくのですが、2012年に入ったときは、私が課長で、その下に専任職員が3人いました。1人は図書担当で1年前に学内異動してきた初心者、雑誌担当が10年間あの図書館にずっといる人、それから、兼任の職員がもう1人、1年前に異動してきたのですが、出版局を兼任していたので、事実上、図書館の仕事はできていないということなので、私の以下2名、あとはパートの非常勤職員数名という状況でした。

この人たちに活性化しろと言ってもなかなか難しいので、あまりミッションとかデューティを与え過ぎると仕事が嫌になってしまうかもしれません。新しい人は「図書館ってそんなところだと思っていませんでした」とくるかもしれないし、10年やっている人は、「そんなこと、前はやっていませんでした」と言うかもしれません。その辺を何とかしておかないと長続きはしないだろうなということで、部署目標というものに入れ込んでみました。これは大学内でそれぞれの部署が設定する部署目標ですが、そのときに3つ決めまし

た。

1つ目は、図書館活性化のために、主たるユーザーである学生に図書館に親しんでもらい、活発に利用してもらえるようにする。キーワードとしては、図書館は難しいところではないよという言い方をしています。これが学生向けですが、利用者のうちには当然先生方もいますので、先生に向けては、教育面から促進するために教員との連携を進めるということで、図書館は結構使えるところですよというのをアピールしていきましようということをやりました。3つ目がスタッフに向けて、これらを達成するために図書館業務の改善と図書館職員の意識向上を図りますということです。実は、さっき言ったように、嫌々だったり「えーっ」と言って働いていると、その雰囲気を利用者に伝わります。皆さんもご経験があると思いますが、働いているスタッフの雰囲気が悪いお店とか二度と行きたくないところがありますよね。あれを避けたかったので、どうせやるならわれわれ自身が楽しんで、自分たちが活性化しましょうということをお願いしてきました。この部署目標は、2013年から15年まで同じものを使ってきました。

これはオフィシャルな部署目標ですが、現場の運用ポリシーとしてはこのようなことを言っています。利用者の快適性を優先すること。それから、いろいろな掲示、注意書き、指示というところで、ノーと言わないということ。最後に、職員の負担はできるだけ軽減しましょうと。いろいろなことをやると、効果は上がるかもしれないですが、職員が大変になってしまうとまたさっきの位置に戻りますので、楽にやること、効率的にやること、そして楽しんでやることをいつも心掛けましようというふうにしているのが、運用ポリシーです。

この2つ、オフィシャルな方と現場レベルのものを掲げてスタートしたのが始まりです。幸い、当時の職員にも理解されて一緒に協力してくれたということで、非常に助かりました。

Twitter を活用して身近な図書館へ

では、具体的な取り組みで何をやったのかというところですが、1つ目は twitter です。ご存じの SNS です。これは 2012 年の 6 月からスタートしました。学内の twitter としては、まだ他部署はやっていなくて、図書館が初めてでした。広報部が twitter を始めたのが、その 2 年後の 2014 年の 6 月です。ですので、学内ではかなり先進的な取り組みで、これこそが学生に向けて図書館は難しくなくて親しみやすい場所なんだということを知ってもらいたくてやりはじめたことでした。

現在、フォロワー数は約 2,800 人です。大学の中にあるアカウントとしては、たぶん最高に多いです。対象としては、在学生をターゲットにしていますので、受験生とか卒業生に向けたようなメッセージはあまり出さない内容です。なので、やっていることは、図書館のことばかりではなく、大学のお知らせとか、こんなことがあったよとか、急に雨が降ってきたよというようなことをやってきています。この twitter に関しては、2014 年に『短期大学図書館研究』で発表させていただいていますので、もしよろしければそちらもご覧いただければと思います。

twitter をやっている大学図書館では新着図書で今日こういう本が入りましたとか、データベースを使ってくださいといった情報の発信型が多いかと思えます。当館の場合はそういうことをやっていなくて、むしろコミュニケーションを大切にしています。積極的に学生のアカウントをフォローしたり、学生が図書館についてつぶやいたら、それに反応してみたりというようなことをやっています。

気を付けていることとして、当然ですけれども誹謗中傷はしないとか、個人情報に触れないとか、あと、苦情が図書館宛てに送られてくることもあります。後でも出ますが、図書館にアクセスしてくる方法として、例えば直接来るとか電話とかメールとかいろいろあるのですが、そういう媒体では言っただけでこなかったようなことを、twitter だと言ってくるんです。うるさいとか、24 時間やってくれとか言ってくるのですが、そのようなある

種の苦情にも、ちゃんとさっきの情報交流のポリシーをもってお答えするというのを頑張ってやってきました。それから、毎日必ずツイートしようとしません。1 カ月何もしないときもあつたりします。こちらから先にフォローはしないというような気遣いをしています。



この twitter が割と成功してしまったのですが、成功したというのは何かというと、2012 年に 12 万人台に落ち込んでいた館者数が、2013 年に 16 万人台まで持ち直して 30% 増になりました。手前味噌ではありますが、おそらくこの twitter をやっていたことが一番影響しているのではないかと思います。その後、15 万人に下がったりもしましたが、2016 年のところまでで大体 15 ~ 16 万人をキープできるようになってきましたので、当初掲げていた、学生の身近な存在になるというのはクリアできたのではないかと思います。

さらに思わぬ効果として、学内の他部署から意外に「図書館ってそんなことをやっているのね」というような新たな接点を持てるようになりました。twitter は本名で登録していない人が多いので、職員かどうかは分かりません。実は私見していますが、フォローしていますという声も聞かれるようになり、こちらから発信している企画展示の話とか、ポスターのデザインとか、学生はどういうふうに反応してくるんですか、何か問い合わせがあるんですかみたいなことも聞かれるようになりました。

館内の改装で使いやすく

もう 1 つは館内改装です。これはなかなか難しいかもしれないのですが、図書館の中のかかなり大

規模な改装工事を、2015年の8月、夏休み中に行いました。図書館自体は2008年にできたので、2015年というと7年後です。築7年で改装かという話なのですが、新図書館開館後、学生からのクレームが続いていました。開館当時、日本図書館協会の建築賞にもエントリーしたそうですが、照明が暗いという理由で落選になったそうです。そのとおりで、閲覧席も暗いですし書架照明も背表紙あるいはラベルが読み取れないくらい暗いです。また、ガラス面とかフローリングとか、非常にデザイン性は高いものの、運用面では困っているところがありましたので、その辺も改善したいということもありました。

例えば、明るさ対策で照明をLEDに交換したり、カウンターを移設したり、企画展示エリアを新しく設置したり、書架照明を入れたりということです。それでも2012年からずっと言い続けて、構想3年、実施1カ月でやっと2015年にできたわけです。2015年には閲覧席側、利用者サイドを改装したのですが、1年半後の2016年に事務室内のレイアウトも変更して、これで一応、当初思っていた設備的なところがコンプリートしたと思っています。

簡単にご紹介すると、このような書架で、左側がビフォア、右側がアフターです。奥の書架の上の照明が、ビフォアときは電球色で電球型蛍光灯が入っていました。ですので、くっきり見えません。アフターの方は、その部分を全部LEDの昼白色に換えましたので、よりくっきり見えるようになりました。これは大好評でした。



あと、カウンターも移設してしまいました。左側がビフォアです。図書館に入っていくと、ゲートの正面にアイランド型のカウンターがありまし

たが、ゲートに向かっては正面を向いて、閲覧席にいる学生には全て背中を向けているという状況があまりにもでしたので、右側のアフターのように、ゲートの横に閲覧席のほうを向いた形に作り直しました。



カウンターを移設したところ、元の場所が空きました、そこに企画展示エリアを新設しました。これは特注の家具で、真ん中に照明が入る、行灯形になっています。展示の企画としては、人工知能とか、夏休み企画で大学生のための恐竜展とか、やる気を出しましょうとかを数多くできるようになりました。

その他、書架照明新設といったところで、さっきのLEDに換えた天井照明とは別に、円形の書架の縁のところに全部テープ状のLEDを貼って、書架が明るく見えるようにしました。当館は入口が2カ所あるのですが、先程のカウンターではないほうの入口を入った正面にこの丸い書架があります。こちらが入ったところでも目立つようになりましたので、ここに、授業で必ず使う指定図書を置くようにしているというようなこともやりました。

改装の最後は事務室内のレイアウト変更ですが、このような細長い事務室です。事務室には、カウンターがついていて、利用者が来ます。職員はカウンターに平行してパーティションを挟む形で向かいあって8～10人が座っているのですが、半分の方はまるっきり背中を向けている。カウンター側を向いている人はいるのですが、いざ利用者のいるカウンターに行こうとするとすぐ遠回りをしないといけないということで、動線がとても悪かったです。これも、閲覧席側の改装を機

に話しがしやすくなった施設部に頼んで、この細長いテーブルを半分に分けて島を2つにして、利用者には接しやすい形になりました。図書館内の改装と事務室のレイアウト変更は、どこの図書館でも気にはなっているところかもしれません。じゃあといってできるとは思えませんが、たまたま3年かけてやってみたらできたということがありますので、皆さんも諦めずにやってみてはいかがでしょうか。

あと、新しく企画展示エリアができましたので、そこで、さっき紹介したようないろいろな図書館独自企画、新入生向けとか、就活とか、夏休みの恐竜展などもやりますし、学内のいろいろな講演会と連携して、講演会をされる先生方に関係図書のリストをいただいて、その本を並べてイベントと連動するようなことをやってみたりしています。どうしても図書館の中にももってしまうことが怖いので、他部署との連携はずっと言うことで、連携もできるようになったということです。企画展示した図書は貸し出しも自由なので、貸し出されるとその棚がスカスカになってきて、利用されていることが分かりやすいですし、実際、当然ながら貸し出しも伸びるという結果になってきています。

授業での情報検索ガイダンスについて

次は教員向けについてです。これは授業でやっていることなので、最終的には学生向けなのですが、基礎演習という1年生の必修の授業で、全てのクラスで情報検索のガイダンスを1コマ分やっているという活動です。基礎演習のような授業はどこの大学でもあると思いますが、新入生が大学での学びや研究をしていくための基礎を身に付けるということで、テーマの探し方、設定、文献情報の検索の仕方、あるいは引用の仕方、プレゼンテーションの方法を学んで、最後にレポートを作るという授業です。本学では、2,400文字のレポートが最終的な課題となります。

15回の授業の中で1回分、大体第3週目ぐらいなので連休の前後の時期に、図書館の職員がお邪

魔して説明をさせていただきます。学部1年生が大体1,000人で、複数クラスを合同で実施することもあるので、回数にすると25～30回となります。これを、私も含めて3～4人の職員が交代で担当しています。ですので、1人が7～8回やることとなります。内容としては、レポートを書くために必要な情報源にはこういうものがあるということが分かるように、辞書、新聞、図書、論文の4つのリソースに分けて、図書館が提供できるそれぞれのリソースと入口を紹介して、簡単な使い方を説明しています。

これは以前から続いているものですが、2016年に内容を大幅に見直してみました。それまでの内容は、図書館の利用方法の説明があって、OPACで検索して、本を書架からいかに見つけ出して借りて使うかという説明が全体の半分以上で、あとデータベースもあるよといったものでした。

実際、利用状況を見ると貸出冊数も減っているのです。そういう中で、あまり紙の本の話ばかりしてもしようがないというのと、2015年から新入生は全員iPadを買わされるようになりました。ですので、今では全学生が持っています。iPadを常に持っている学生に変わってきたので、それならば図書館で契約しているデータベースとか、電子ジャーナルとか、あるいは電子書籍をどう使うかという話しに切り替えた方がいいのではないかと見直してみました。

これは、さっきご覧いただいた4つのリソースの区分けと同じです。OPACの話もしますが、それは全体で言うと4分の1に減りました。こういうような大改革的なことをやりました。

ガイダンス内容の刷新について

見直しを行ったのは、2015年に開催した第1回「Field Innovation」活動。本学への学内連携、産学連携や産学立派、産学立派の見える化など

	【従来のガイダンス】	【見直し後のガイダンス】
目的	図書館の利用方法の説明・告知	論文を目的とした、授業や研究の目的達成
対象	単位（図書館サービス）の提供	目的（論文作成）の達成
特徴	目的付	目的付（変更なし）
構成（冊）	① OPAC説明・検索実習（40） ② 電子資料の紹介（10） ③ 図書館サービス紹介（10）	① 授業や研究について（10） ② 辞書・DBの活用方法（10） ③ 辞書・DBの活用方法（10） ④ 辞書・DBの活用方法（10） ⑤ 辞書・DBの活用方法（10） ⑥ 辞書・DBの活用方法（10）

実はこのときに、富士通さんにお手伝いをしていただきまして、フィールドイノベーション活動

という、簡単に言うと業務改善のような活動を並行してやっていました。その中で、改善すべきところは議論する中で、図書館から利用者へのガイダンスを見直しがあげられたという経緯があります。

内容を変えたのと同時に、そこで紹介しているデータベースが実際どのくらい使われているのかということを利用統計で検証していきました。ご覧いただいているのは年間ベースの利用回数ですが、2015年までと2016年にガイダンスの内容を刷新した後では、辞書・事典はちょっと減っていますが、その他は前年比増になっていて、特に論文、新聞に関しては50%も増えていることが分かりました。やはりどこかできちんと紹介しておく、ちゃんと使うようになるということです。

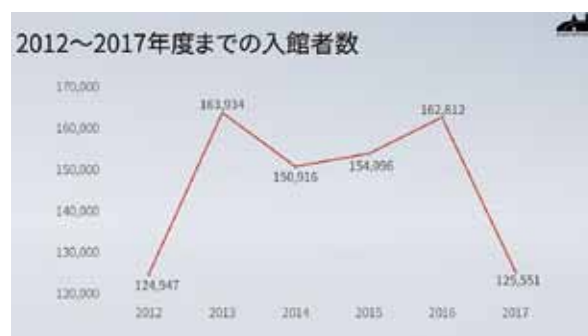
区分	2015年度	2016年度	前年比
論文	2,521件	3,895件	154%
新聞	3,070件	4,540件	147%
図書 (OPAC検索回数)	80,829回	94,844回	117%
図書 (貸出冊数)	3,916冊	4,389冊	112%
入館者数	75,433人	82,042人	108%
辞書・辞典	1,715件	1,545件	90%

このようなデータが取れてきましたので、INFOSTA（情報科学技術協会）が毎年開催しているINFOPROという情報プロフェッショナルシンポジウムで、昨年11月にガイダンスの内容の変更に伴う電子資料の利用の影響検証という発表もさせていただいております。

ガイダンスを変えるということと、それを検証するという事に取り組んできました。このように、検証結果が出せると職員とも共有できて、みんなで汗をかいてやった結果こんなに伸びたという認識がまたやりがいにつながるのではないかと考えています。

そして迎えた2017年

ここまで結構いろいろ頑張ったのですが、2017年（昨年）、何と6年前と同じ12万人台に激減してしまいました。このM字ラインです。



これはたまたまかなと思われるかもしれませんが、そこで、今年の4月から7月までの入館者数を比較してみると、6万9,000人台ということで、昨年とそれほど変わりませんでした。16万人を誇ったときは7月までで8万人来ていましたので、このペースでいくと今年も昨年同様の12万人台が見込まれます。これはなぜかという、簡単です。8号館という新しい建物が昨年の4月にできた影響です。そちらにお客さんが流れたという、とても分かりやすい原因です。

8号館は、ここは英語専門の学習施設です。建物全体が学習空間とネイティブ教員の研究室と教室になっていて、ここに行ったら英語でしゃべらなければいけないという状況、あるいは、英語の課外学習のための学習支援も受けられるというようなところになっています。同じ機能を持つ施設は以前からありましたが、8号館として拡大移転しました。

キャンパス内の配置をご覧いただくと、新しくできた8号館は、キャンパスの真ん中です。実は、こっちの上に行くともっと寄りの駅があるので、この入り口から来る学生が結構多いんですね。本当にキャンパスの真ん中で、学食も近い。片や図書館はキャンパスの一番奥にありますので、立地条件からして負けてはいるのですが、8号館のほうに純粹に流れました。ただ、残念なのは、8号館は図書館と違ってゲートのシステムが導入されていないので、多くの学生に利用されていることは分かりますが、実際に何人使っているかがはっきりしていません。



新しくできた8号館について

※当日は動画を見ていただきました。

8号館の中は、少し昔のアメリカ・ニューヨークというコンセプトで、アンティークな家具が置いてあり、空港のような、吹き抜けの広い空間です。これは入口のちょっと横のところですが、学生がいっぱいいますね。2階は、本当に英語しかしゃべってはいけない場所です。ネイティブ教員が待ち構えていて、英語で話し掛けるという場所なのですが、ここにもちゃんと学生はいるのです。

この英語学習施設は、まるっきり新しくできたわけではなく、それまでは図書館の隣の建物にあって、昨年の本学30周年記念に合わせて完成しました。

こちらは同じ日の図書館です。どの席にも結構いると思いませんか。閲覧席がトータルで300席あって、これが一番静かなキャレル風の閲覧席ですが、結構います。窓際の席や館内全体に学生が来ています。

図書館の学生アルバイトに聞くと、8号館はうるさくて勉強できないという意見もあります。フリートークできて、食べ物もOKなんですね。そのため、勉強したいときは図書館に来ますという、非常にありがたい声も聞こえています。確かに、非常に静かです。「しゃべらないで」とか「静かにしてください」という掲示も、職員が注意することもあります。それぐらい静かに勉強してくれています。ですので、勉強する学生は確かに来ていると思うのですが、数字で見ると2割減ってしまいました。こういう現実があります。やはり場所には勝てないということと、結局、図書館

でもきるけれども、みんなでしゃべりながらでもできる勉強は、そっちのほうに流れていくという現実もあるかと思います。

さらなる取り組みへ

ここまで、ほぼオチがついたように「いろいろ頑張ったけれども、はみ出す活動をしたけれども、場所には勝てなかったよね」と言うところの先がありません。ですので、そうは言っても少し頑張ってみようと思いました。

本学には、神田佐野文庫という貴重図書のコレクションがあります。佐野というのは、学校法人佐野学園の名称からきています。神田佐野文庫は、以前は洋学文庫と呼ばれ、幕末前後ぐらいにオランダ語や英語など西洋の言葉を日本人が学ぶ、その時期に輸入したり独自に作ったりした外国語の学習に関する資料等を収集したものです。有名なところでは、2年前にシーボルトの直筆の書簡が発見されて、いくつかの新聞にも載りました。その展示コーナーを3号館に新設する予定です。

3号館はキャンパスの真ん中にあります。場所的にデメリットの多かった図書館ですが、3号館という真ん中、教室がある建物に出店を置くことに成功しました。神田佐野文庫の展示がメインではありますが、図書館管轄の場所ができましたので、そこでこれからいろいろできるなと思っております。

実はもうひとつ、この3号館の展示コーナーの向かいに80型のサイネージを付ける計画です。この3号館の中には学内売店があります。そこを今年の4月に改装してコンビニ風にしたところ、非常に多くの学生や教職員が利用するようになりました。図書館の前にもサイネージはありますが、通行量の多いこちらの方が効果的です。

今後、このサイネージをきっかけに、学内全体のサイネージにも図書館が関与できたらよいのではないかと考えています。もしかしたらこの辺が「はみ出している」かもしれません。10年ぐらい前に機関リポジトリが開始したときに、当時千葉大学の土屋先生が「これからの図書館は機関リポ

ジトリをやって学内の研究成果を図書館から発信していかないと、仕事なくなるよ」と言っていたのをご存じの方はいらっしゃるでしょうか。それと無理やりに通わせているのですが、図書館は学内の情報をちゃんと集めて、整理して、学内へ知らせる。対象は学生がメインですが、先生や職員でもいいです。それをサイネージでやるのもありなのではないでしょうか。

大学あるあるで、皆さんもそうだと思いますが、自分の大学の中で今日どんな説明会やイベントがあるかを知らなかったりしませんか。急に人がたくさん来て、調べてみたら何かの講演会をやっていたみたいなことです。そういうことをきちんと整理して、的確にサイネージで出していくということです。情報の収集、整理、発信、提供は、図書館でやったらすごく得意だと思うのです。

では、図書館は何をすればいいのか

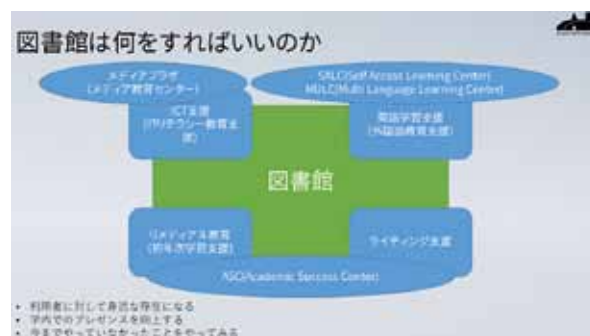
最後に、何でこんなことをやってきたのかというところで閉じたいと思うのですが、最初、2012年に、「活性化」と言われて何をすればいいのかを考えました。図書館の役割ですね。例えば、ICT支援、ITリテラシー教育みたいなことを図書館でやったらどうでしょう。学生はiPadを持っているので、使い方に困っていたら図書館に行こうと思うでしょう。これはもしかしたら活性化につながるかもしれません。でも、皆さんのところもそうかもしれませんが、そのような業務は情報システム系の別部署がやっています。

例えば、リメディアル教育、初年次教育も、図書館でできるかもしれません。よく入学前課題なんかで図書館で課題図書を出したりします。あと、ライティング支援もそうです。レポートの書き方などを、実は図書館の中でやっていました。ですが、うちの場合だと、アカデミックサクセスセンターという別部署が昨年立ち上がり、リメディアル教育とライティング支援をやることになったので、ここも移っていきました。

それから、英語学習支援です。外国語学部ではない学部の大学の場合は、例えば理工系の学部で

英語も必要だということで、図書館で多読本マラソンなどをされるかもしれません。そういう外国語の支援も図書館でできるのですが、うちの場合は、さっきの8号館をはじめとするところが専門でやっています。

このように捉えると、図書館でできることがすごく少ないように見えてしまうのです。しかし、本当はもっといろいろなことができるのではないかと、ということを考えてみた結果です。



当館の twitter では新着図書の話などはあまりしないというお話をしましたが、一番「いいね！」やリツイートの数が多いのは、天気の話と、図書館の周りにお花が咲きましたとか、ここにこんな虫がいましたというような話です。これを、もし教務課の twitter アカウントで「教務課のカウンターにチョウチョが飛んできました」とツイートしたらどうなると思いますか。大炎上です。「教務課、仕事をしろ」と絶対炎上するのですが、図書館であれば「いいね！」が伸びるのです。

図書館というのは、意外に何でもできます。だから、硬いも軟らかいもあるのですが、意外に何をやっても OK だと思います。できれば硬いほうに寄せたいのですが、こういうやり方も一つあるのかなと思っていただければありがたいと思います。ここまで、少しお恥ずかしい部分もご紹介させていただきましたが、以上で私からのお話を終わりとさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

【参考文献】

- ・吉野知義. 新たな学習交流拠点を目指して: 神田外語大学附属図書館の取り組み. 私学経営. 2016, no. 502, p. 36-42. <http://ci.nii.ac.jp/>

- naid/120005894196/ja/, (参照 2018-09-30).
- ・吉野知義. 図書館職員による館内サイン改善の取り組み: Library with Design and Ideas. 図書館雑誌 = The Library journal. 2018, vol. 112, no. 2, p. 90–91. <http://ci.nii.ac.jp/naid/120006415233/>, (参照 2018-09-30).
 - ・吉野知義. SNS を使った学生とのコミュニケーション(全国研修会報告 利用者とのコミュニケーションを考える). 短期大学図書館研究. 2014, no. 34, p. 127–132. <http://ci.nii.ac.jp/naid/120005675291/>, (参照 2018-09-30).
 - ・吉野知義, 菊地高志, 白幡恵子. 図書館ガイダンスの刷新による利用状況への影響の検証. 情報プロフェッショナルシンポジウム予稿集. 2017, vol. 2017, p. 73–76. <http://ci.nii.ac.jp/naid/130006192907/>, (参照 2018-09-30).
 - ・吉野知義. ウチの図書館お宝紹介!(第169回)神田外語大学附属図書館所蔵「洋学文庫」-シーボルト直筆書簡・ラーナウ『諸術秘蔵』-. 図書館雑誌. 2017, vol. 111, no. 4, p. 246–247. <http://ci.nii.ac.jp/naid/120006310479/>, (参照 2018-09-30).